

教育研究開発(FD)

－ 学生による授業評価アンケート 結果と授業改善 －

2021



TOKYO SEITOKU
COLLEGE

東京成徳短期大学

2021 年度 学生による授業評価アンケート 結果と授業改善

目 次

はじめに	3
【1】「学生による授業評価アンケート -より良い授業を目指して-」趣旨と目的 ...	4
【2】実施の方法	4
資料1「授業アンケートの依頼と実施方法」	5
資料2「授業アンケート用紙」	10
資料3「結果コメント依頼」	12
【3】集計結果と考察・授業改善コメントの方法	14
(1) 学科全体の集計結果＜結果の表とグラフ＞	15
(2) 各科目の集計結果と考察・授業改善コメント ＜各科目の結果の表・グラフと教員コメント＞	18
＜遠隔授業の課題－その対策と成果＞	150
【4】アンケート結果の分析と評価	160
おわりに	164
索 引	165

はじめに

この「学生による授業評価アンケート」は数回の改編を重ね、現在の学習成果を軸とし授業構成要素を分析し、より良い授業への改善が見通せる形となった。従来は「学生満足度」を軸とするアンケートを行っていたが、これを「学修成果（修得・向上できたもの）」を軸とするものへと改編を行い、学習の成果と授業構成要素への回答との関連性を比較・検討することによって、より良い授業（学修成果が上がる授業）への改善の方向性を明らかにしようとするものである。

また、科目ごとに設定した授業の工夫について「教員設定質問」を設け、教員自らが質問項目を設定する仕組みを用いた。教員それぞれが授業に関するアセスメントを検討することは、より良い授業を目指すために重要な姿勢の一つであると考ええる。

本学の授業評価アンケートでは、単に授業の良し悪しを数字で可視化するのではなく、そこからどのような改善を見通すことが出来るか、授業を行う教員も、また授業を受ける学生も意識化することを重視した仕組みとしている。

このようにして積み重ねられてきた「授業評価アンケートーより良い授業を目指して」であるが、重要なのはその中で見えてきた問題の方向に対して、どう具体的改善を行い、その結果どのような効果を見出すことができたかである。今年もアンケート結果への教員コメントにはそうした授業改善とその結果についての考察を求め、集約した。この改善の効果についての情報を公開し共有することで、さらなる授業改良の方向を探るきっかけになることを期待したい。

【1】「学生による授業評価アンケート－より良い授業を目指して－」趣旨と目的
「東京成徳短期大学 学生による授業評価実施規程」より
(趣旨)

第1条 この規程は、東京成徳短期大学教育開発研究専門委員会規程第2条の規程に基づき、本学の教育開発研究活動等の一環として行う学生による授業評価（以下授業評価という。）の実施と運営について必要な事項を定める。

(授業評価の目的)

第2条 本学が開設する授業科目について学生による評価を行い、その結果を教員が共有し授業改善に役立てるとともに、ファカルティ・ディベロップメント活動を促進し、本学の教育開発研究活動を推進し、教育の質の向上に資することを目的とする。

【2】 実施の方法

新型コロナウイルス感染拡大によって、2021年度前期は、対面授業を目指していたが、結局緊急事態宣言の発令で、ほとんどの期間がオンラインの授業となった。そこで「授業評価アンケート－より良い授業を目指して－」では、オンライン授業の中でWEB回答の形式をとることとした。

アンケートの配布・回収は企画・IR室が行い、教員ごとに担当科目単位でアンケート依頼のデータを送り、それを各教員がオンライン授業の資料と同様学生に提示する仕組みとした。教員は指定の期間内(概ね授業終了までの1ヶ月間)にそれぞれの授業でアンケートを実施し、回答は学生がそれぞれWEB上で送信する形とした。回答はそのまま企画・IR室を経由してデータ処理業者に届き、各科目単位で集計された。

本アンケートは、選択回答と記述部分とからなり、質問には共通質問と各教員による設定質問とがある。学習成果に対する質問を設け、学生自身がその授業を履修することによって考え方や知識・技能といった学修成果がどの程度得られたかを自己評価させている。自由記述部分は授業構成要素(授業方法、進度、教科書・教材、板書・資料提示、学生への対応、環境・設備)について、評価する点、改善を求める点それぞれを学生に自由に記述させ、単なる感想ではなく、より良い授業につながる学生の声を求めるものとした。

全授業、全クラスでの実施を前提とすることから、学生への負担意識の軽減、惰性による作業的回答を避けるため、問題を極力厳選しアンケートの数を減らした。

今回はWEBアンケート形式を採用したことで、学生それぞれが自由な、都合の良い時間に回答できる形となり、より学生の自由意思が反映されるアンケートとなった。

資料1 「授業アンケートの依頼と実施方法」

短期大学 専任教員・非常勤講師 各位

東京成徳短期大学

学務部教育開発研究(FD)担当

学生授業評価アンケートの実施のお願い <前期科目>

2021年度前期「授業アンケート—より良い授業を目指して」を次の要領で実施いたします。

このアンケートは、本学の教育がどのように学生に理解され、どんな教育効果を生んでいるかを把握し、より良い授業に向け教育開発研究を推進することを目的とします。また学生には、授業がどのような目的・ねらいに基づいて行われていたか再確認を促し、より高い学修成果を生むことを期待するものです。教員・学生双方が授業アンケートのねらいを共有し、教員は、常にその目標達成のためにどのような教授方法が効果的であるかを探求する姿勢を持つこと、これがより質の高い授業の実現につながるものと考えます。

尚、本年度もオンラインでの授業が多く行われたことから、アンケート内容・方法を一部修正しました。アンケートは Web 回答方式を用いますが、ここでは回答率が低く出る傾向にあります。今回できるだけ学生が回答しやすい形に変更し、回答率の向上を目指します。また学生の実態が十分回答に反映されるよう表記を(記述回答)とし、学生が授業において感じている点を率直に記述できる方法をとりました。

アンケートの狙い・方法をご理解いただき、何卒ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

【アンケートの内容】

『 授業アンケート ― より良い授業を目指して 』

<共通質問>

問1：あなたはこの授業の目的を理解して受講したと思いますか。

(5 4 3 2 1)

問2：あなたはこの授業に対して真剣に取り組みましたか。(事前学習など自主的学習を含む)

(5 4 3 2 1)

問3：あなたはこの授業の内容を理解できたと思いますか。

(5 4 3 2 1)

問4：この授業であなたが向上・修得できたと思われるものを次の中から複数選択してください。

- (ア) 教養・美しい心
- (イ) 専門的知識・技能
- (ウ) 研究意欲
- (エ) 保育や子どもに関わる実践力・即応力
- (オ) 保育者に求められるコミュニケーション能力
- (カ) 学びを深めるための協同的課題解決能力
- (キ) 社会的な責任感や倫理観
- (ク) 目的に向かう意欲・行動力

問5：この授業について、①授業の方法（オンラインを含む）・授業進度、 ②教科書・教材・資料について、 ③教員の話し方・学生への対応など、良かった点を書いてください。

【記述回答】

--

問6：この授業について、①授業の方法（オンラインを含む）・授業進度、 ②教科書・教材・資料について、③教員の話し方・学生への対応など、改善してほしい点を書いてください。

【記述回答】

--

問7：この授業を履修して、幼児教育科の専門分野での考え方や知識、技能が身につきましたか。

(5 4 3 2 1)

<教員設定質問>

問8： 質問は事前に設定し企画・IR 室までお知らせ下さい。(下記実施方法参照)

(5: そう思う 4: ややそう思う 3: どちらともいえない 2: あまり思わない 1: そう思わない)

【実施方法】

(アンケート Web 回答方式—授業を通して学生への周知・配信をお願いします)

- 別配布の授業アンケート URL を学生に通知し、そこから回答するよう周知・指示をお願いします。

(今回学生は URL から直接アンケートを開き、そこから回答送信できる方式を採用する)

- 問 8「教員設定質問」について、それぞれの授業で特に学生に問いかけたい内容の質問を設定してください。

※ 教員設定質問について

教員設定質問は6月23日(水)までに下記サイトから入力してください

<https://forms.office.com/r/vSKaabzDHw>

教員・科目ごとに個別設定質問のアンケートを作成します。

尚、回答選択肢は集計の関係により既定のものが使用できるよう、質問文の設定をお願いいたします。

企画・IR 室 (ir@tsu.ac.jp)

- 回答率を高めるために、できるだけ授業時間に学生に回答を奨励してください。
(回答はスマホから、また授業時間外でも可能です)
- 問 5、問 6 の『記述回答』では、授業改善の方向性が読み取れる重要な情報となりますので、必ず記述するよう声かけをお願いします。

【アンケート実施期間】 7月5日(月)から8月7日(土)

授業計画との関係で適当な日をお選びください。尚、アンケートの回収率が高くなるよう、できるだけ授業時間に回答できるようご配慮・声かけお願い致します。(回答は授業時間外でも可能です)

授業アンケート集計結果は9月中旬頃にお届けいたします。その後、授業に関する PDCA の一環として、それぞれの担当授業のアンケート結果を考察の上、『評価と授業改善について』のコメントのご提出をお願いいたします。

学生授業評価アンケートの実施のお願い <通年・後期科目>

2021 年度後期「授業アンケート<より良い授業を目指して>」を次の要領で実施いたします。

このアンケートは、本学の教育がどのように学生に理解され、どんな教育効果を生んでいるかを把握し、より良い授業に向けた教育開発研究を推進することを目的とします。また学生には、授業がどのような目的・ねらいに基づいて行われていたか再確認を促し、より高い学修成果を生むことを期待するものです。教員・学生双方が授業アンケートのねらいを共有し、常にその目標達成のための効果的授業方法を探求する姿勢を持つことが、より質の高い教育の実現につながるものと考えます。

尚、本年度前期はオンラインでの授業が中心となったことから、アンケート内容・方法を一部変更しました。前期に揃え後期もアンケートは Web 回答方式を用いますが、ここでは回答率が低く出る傾向にあります。できるだけ学生が回答しやすい形を用い回答率向上を目指し、また学生の実態が十分回答に反映されるよう(自由記述)を(記述回答)として、学生が授業において強く感じている点を率直に記述できる方法をとりました。

アンケートの狙い・方法をご理解いただき、何卒ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

【実施方法】

(アンケート Web 回答方式—teams 授業を通して学生への周知・配信をお願いします)

- ① 別記授業アンケート URL を学生に通知し、そこから回答するよう周知・指示をお願いします。
(学生はワンクリックでアンケートに飛び、そこから回答送信できる)
- ② 問 8 「教員設定質問」について、各教員はそれぞれの授業で特に学生に問いかけたい内容の質問を設定してください。(回答欄は既定の選択肢が使えるよう、設問の設定をお願いします。)

■教員設定質問の報告

教員設定質問は事前に下記サイトに入力してください。12 月 13 日 (月) まで

<https://forms.office.com/r/zbJsUZkQBK>

期限までに入力ない場合は昨年及び前期のご担当科目から質問を設定いたします。

企画・IR 室 (ir@tsu.ac.jp)

- ③ 回答率を高めるために、できるだけ授業時間での回答を学生に奨励してください。(回答はスマホから、また授業時間外でも可能)
- ④ 問 5、問 6 の記述回答では、授業改善の方向性が読み取れる重要な情報となりますので、必ず記述するよう声かけをお願いします。

【実施期間】 12月20日(月)(予定)から1月22日(土)

授業計画との関係で適当な日をお選びください。尚、アンケートの回収率が高くなるよう、できるだけ授業時間に回答できるようご配慮をお願いします。(回答は授業時間外でも可能です)

授業アンケート集計結果は2月中旬頃にお届けいたします。その後、授業に関するPDCAの一環として、それぞれの担当授業のアンケート結果を考察の上、『評価と授業改善について』のコメントのご提出をお願いいたします。

資料2 「授業アンケート用紙」

設問 1

単一選択 必須

あなたはこの授業の目的を理解して受講したと思いますか。

- ☐ 5 そう思う
- ☐ 4 ややそう思う
- ☐ 3 どちらとも言えない
- ☐ 2 あまりそう思わない
- ☐ 1 そう思わない

設問 2

単一選択 必須

あなたはこの授業に対して真剣に取り組みましたか。（事前学習など自主的学習を含む）

- ☐ 5 真剣だった
- ☐ 4 わりと真剣だった
- ☐ 3 どちらとも言えない
- ☐ 2 あまり真剣ではなかった
- ☐ 1 真剣ではなかった

設問 3

単一選択 必須

あなたはこの授業の内容を理解できたと思いますか。

- ☐ 5 理解できた
- ☐ 4 わりと理解できた
- ☐ 3 どちらとも言えない
- ☐ 2 あまり理解できなかった
- ☐ 1 理解できなかった

設問 4

複数選択 必須 1-8個選択

この授業であなたが向上・修得できたと思われるものを次の中から複数選択してください。

- ☐ (ア) 教養、美しい心
- ☐ (イ) 専門的知識・技能
- ☐ (ウ) 研究意欲
- ☐ (エ) 保育や子どもに関わる実践力・即応力
- ☐ (オ) 保育者に求められるコミュニケーション能力
- ☐ (カ) 学びを深めるための協同的課題解決能力
- ☐ (キ) 社会的な責任感や倫理観
- ☐ (ク) 目的に向かう意欲・行動力

設問 5

自由記述 1,400文字入力

この授業について、①授業の方法（オンラインを含む）・授業進度、②教科書・教材・資料について、③教員の話し方・学生への対応など、良かった点を書いてください。【記述回答】

0 / 400 文字

設問 6

自由記述 1,400文字入力

この授業について、①授業の方法（オンラインを含む）・授業進度、②教科書・教材・資料について、③教員の話し方・学生への対応など、改善してほしい点を書いてください。【記述回答】

0 / 400 文字

設問 7

単一選択 必須

この授業を履修して、幼児教育科の専門分野での考え方や知識、技能が身につきましたか。

- ☐ 5 身についた
- ☐ 4 わりと身についた
- ☐ 3 どちらとも言えない
- ☐ 2 あまり身につかなかった
- ☐ 1 身につかなかった

設問 8

単一選択 必須

貴方は、フィールドワークを通して、幼児への理解と教師の役割を学ぶことが出来ましたか。

- ☐ 5 そう思う
- ☐ 4 ややそう思う
- ☐ 3 どちらとも言えない
- ☐ 2 あまりそう思わない
- ☐ 1 そう思わない

アンケートに回答する

東京成徳短期大学
学務部 教育開発研究(FD)担当

授業評価アンケート集計結果の通知及びコメント・授業改善結果について(依頼)

2021年度前期「授業アンケート集計結果」をお届けいたします。

このアンケートは、より高い学習成果を目指して、授業の構成要素が学生にどのように評価され、効果を生んでいるかを検証し、またそれぞれの教員がどのような方針で授業を行い、その効果をどう確認することができたかを、担当教員の設定質問から明らかにして、より良い授業に向けた改善方法の一端を探ることを狙いとするものです。

アンケート結果の集計方法としては、学生の知識・技能の修得度(学びの成果)と、授業構成要素の評価、教員設定質問の回答とを相関させ、教育開発研究・授業改善に役立つ情報となるよう、クロスでの集計を行いました。どのような授業方法が、より高い学びの成果を上げることができるか、成果を感じている学生はどのような授業要素を評価し、成果を感じない学生は何の評価が低いのか、自由記述(効果を感じた授業方法、改善を望む点)に関しても、学びの成果別に集約し、考察頂ければと思います。

こうした集計の結果から、教育開発研究・教育改善がどのように行われ、どんな成果を上げることができたか、分析考察の結果をご提出頂きたいと思います。ここでのコメントを集約公表し、一人ひとりの取り組みを参考にそれぞれが教育開発研究・授業改善を進め、東京成徳短期大学全体で、より魅力ある質の高い授業を目指したいと思います。

コメントは下記の要領で作成をお願いいたします。

皆さまの御理解と御協力、どうぞよろしくお願い申し上げます。

記

■コメント記入アドレス

<https://forms.office.com/r/UU3HA6g6Rb>

・ご自身の科目を選択してください。

・アンケート結果(教員設定質問も含め)についてのコメント <300字程度>

・授業改善とその結果についてのコメント <300字程度>

以上を記入してください。

※連続しての入力はできませんので1科目ごとに送信してください。

■入力期限

2021年10月27日(水)

■問い合わせ

東京成徳短期大学 企画・IR室 ir@tsc.ac.jp

以上

東京成徳短期大学

学務部教育開発研究(FD)担当・企画 IR 室

「授業評価アンケートより良い授業を目指して」

集計結果の通知及び、結果のコメント・授業改善成果について（依頼）

2021 年度後期「授業アンケート集計結果」をお届けいたします。新型コロナウイルス感染症拡大の中で、大学での対面授業と遠隔授業とがミックスされた、大変困難な授業運営となり、ご対応いただきましたこと本当にありがとうございました。さらにその中で「授業アンケートより良い授業を目指して」にご協力いただきましたこと、お礼申し上げます。

このアンケートは、より高い学習成果を目指して、授業の構成要素が学生にどのように評価され、効果を生んでいるかを検証し、またそれぞれの教員がどのような方針で授業を行い、その効果を確認することができたかを、担当教員の設定質問から明らかにしながら、より良い授業に向けた改善方法の一端を探ることを狙いとするものです。

アンケート結果の集計方法としては、学生の知識・技能の修得度（学びの成果）と、授業構成要素の評価、そして教員設定質問の回答とを相関させ、クロスでの集計を行いました。どのような授業方法が、より高い学びの成果を上げることができるか、学習成果を感じている学生はどのような授業要素を評価し、成果を感じない学生は何の評価が低いのか、自由記述に関しても学びの成果別に考察頂ければと思います。この考察についてのコメントを、別送 forms「授業評価アンケート結果コメント」の「1-①授業アンケート結果について」にご記入してください。また、継続的に同じ科目（または同等の科目）をご担当の先生は、過去の結果に対する本年度の改善成果について「1-②授業改善とその成果」にコメントいただきますようお願い致します。

更に今年度も新型コロナウイルス感染拡大により、遠隔授業を併用した講義・授業を実施して参りました。このことによる授業への影響と対策・その結果について、アンケート結果（自由記述等）から読み取れるものがあれば「2. 遠隔授業の課題—その対策と成果」にお書きください。

ここでのコメントを集約し、それぞれの取り組みでどんな成果を上げることができたか、考察の結果を公表し、それらを参考に東京成徳短期大学全体で教育開発研究・授業改善を進め、より魅力ある質の高い授業を目指したいと思います。

コメントは企画・IR 室 (ir@tsu.ac.jp) より授業アンケート結果と合わせて forms「授業アンケート結果コメント」をお送りいたしますので、2月28日(月)までにご記入・送信お願いいたします。

皆さまの御理解と御協力、どうぞよろしくお願い申し上げます。

* forms「授業評価アンケート結果コメント及び授業改善について」*

- ・科目コード(授業番号) 0000000 半角数字
- ・担当教員名 000 00(フルネーム)
- ・授業科目名 0000000
- ・コメント
 - 1-① アンケート結果(教員設定質問も含め)について <300 字程度>
 - 1-② 授業改善とその成果について <300 字程度>
 - 2- 遠隔授業の課題—その対策と成果 <500 字程度>

■提出期限 2022年2月28日(月)

(提出・問い合わせ先)

東京成徳短期大学 企画・IR 室(担当:内田)

E-mail. ir@tsu.ac.jp

TEL. 03-3908-4563 / FAX. 03-3907-6195

【3】 結果の集計と考察・授業改善コメントの方法

集計されたアンケート結果は、各教員に通知され、その結果から読み取った内容と授業改善についてのコメントを作成する。アンケートの結果の集計に際しては、学習成果の高低（「5」の回答と「4」の回答、「3 2 1」の回答）と授業要素「授業目的の理解」「学習の意欲・姿勢」「授業内容の理解」とをクロスでグラフ集計し、その相関から、学習成果をあげる授業要素について考察できる形としている。また、自由記述に関しても、評価できる点、改善を求める点について、学生の学習成果との関連で読み解くことができ、学習成果の評価が低い学生は、どのような改善点を求めているか、そのことによって一つの授業改善の方向が見通せるものとする。

また今年度後期については、これまでの授業改善の結果として効果が認められた点のコメントの記載を依頼した。授業アンケートの結果のコメントと授業改善について、経年実施の成果として認められるものがあれば、そこについて公表・情報共有し、お互いの授業改善に向けた一つの動きになることを期待したい。

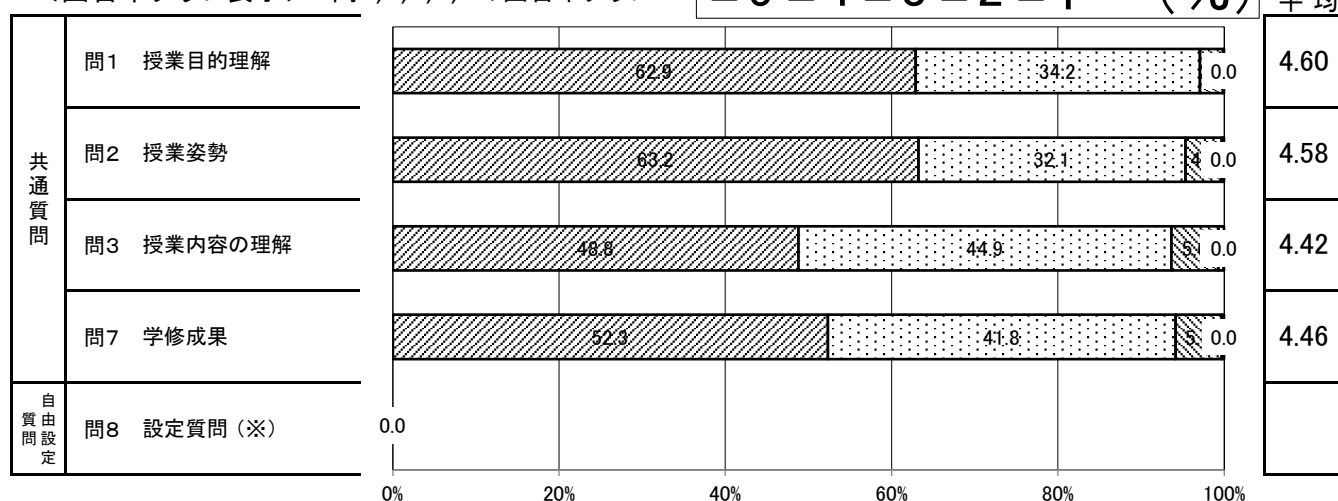
(1) 学科全体の集計結果

＜結果の表とグラフ＞

科目コード: _____
 授業科目名: 全体 _____
 担当教員名: _____

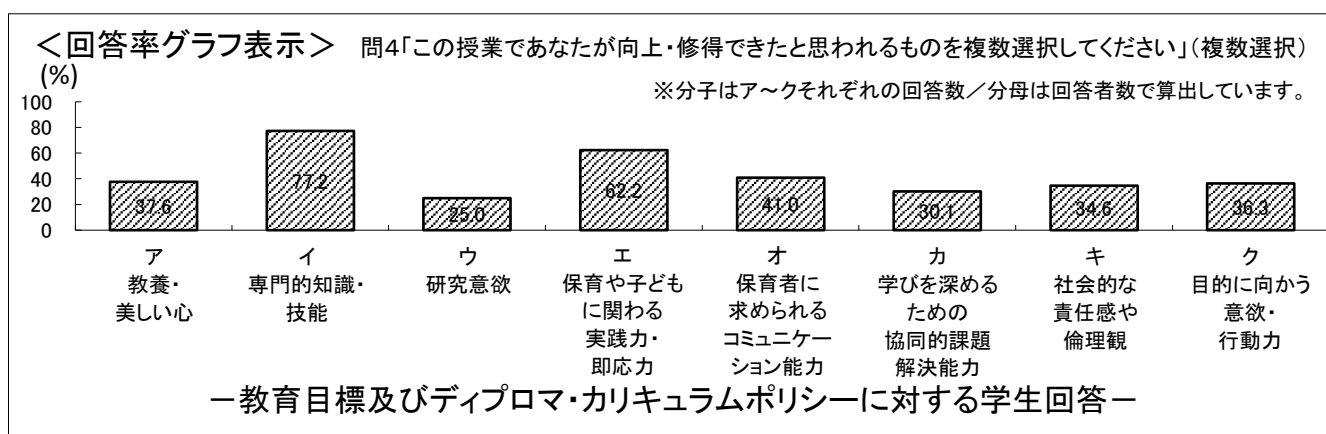
2021年度 前期
 履修者数: 3788 名
 回答者数: 2073 名

<回答率グラフ表示> 問1,2,3,7,8の回答率グラフ



※ 設定質問なし

問5・問6(記述回答)「授業(オンラインを含む)・教材資料提示・学生対応等について」は別記配布



《担当教員のコメント》

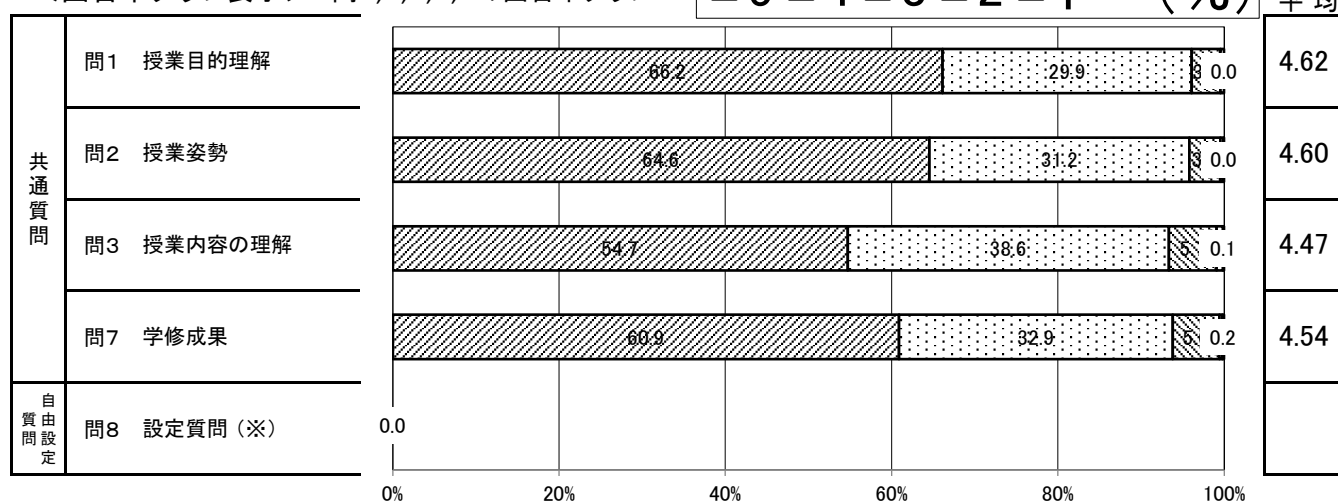
【授業アンケート結果(問7学修成果とのクロス集計、教員設定質問を含め)へのコメント】

【授業改善—授業アンケートを受けて】

科目コード: _____
 授業科目名: 全体 _____
 担当教員名: _____

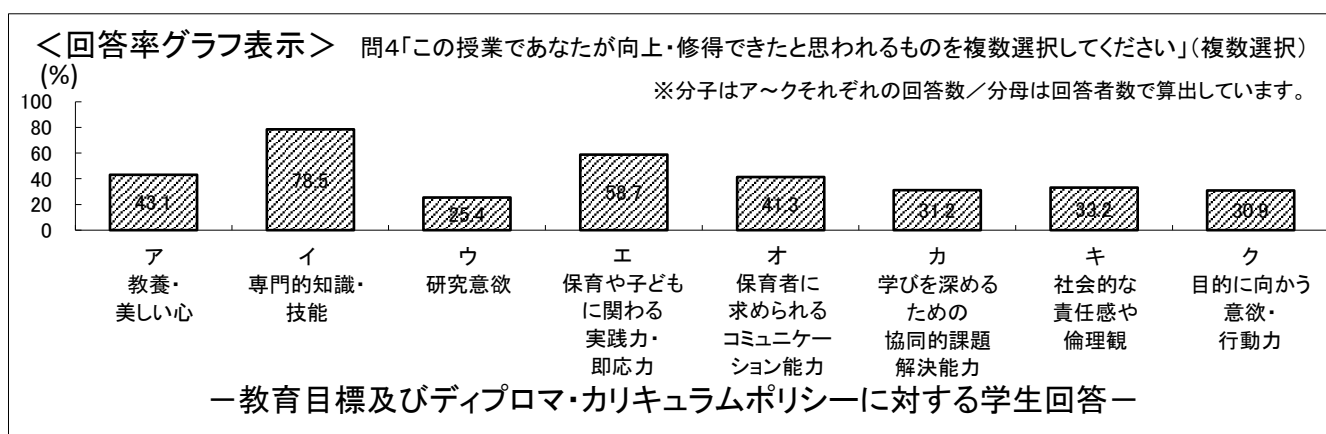
2021年度 後期
 履修者数: 5080 名
 回答者数: 2541 名

<回答率グラフ表示> 問1,2,3,7,8の回答率グラフ



※ 設定質問なし

問5・問6(記述回答)「授業(オンラインを含む)・教材資料提示・学生対応等について」は別記配布



《担当教員のコメント》

【授業アンケート結果(問7学修成果とのクロス集計、教員設定質問を含め)へのコメント】

【授業改善—授業アンケートを受けて】

(2) 各科目の集計結果と考察・授業改善コメント

<各科目の結果の表・グラフと教員コメント>

遠隔授業の課題—その対策と成果

池田 三鈴 幼児体育(運動あそび)	Teamsのチャネル機能を使うことで、資料の事前アップロードによる資料印刷・配布の軽減、模擬授業グループでの資料の共有や打ち合わせの記録、当日までに作成する指導案などを共同的に編集する作業が楽になったと感じた。一方で、受け身で参加する学生のデメリットが大きく、作業した人は少なからずの実力をつけることができたと思うが、オンライン上での作業は、ITリテラシーやスキル、家庭内の環境に影響されることもあり、均等に考えることがなかなか難しいと感じる。
池田 三鈴 幼児体育(身体表現)	都内の感染者数がまだ高い状況の中、一部遠隔受講を希望する学生に対しては実践学習を終えた後にそれに代わる別の課題を別途提示するようにした。授業者は1人であり、広い体育館を大きく動き回って授業を展開する為、置きカメラでは到底リアルタイムで配信できず、授業者の声も十分聞き取れず、そこに同席することで「学び」となってしまうことに疑問があったことも一つの理由である。また、実践をしてみて感じたことを、別のどのような課題に変えられるのか、今期初めて実践した試みは、やってみないことには分からないことが多かったことが大きい。一方で、授業の情報として事前に資料をアップロードし、授業後にタイムリーに映像や写真を共有することによって、遠隔者に早く授業に戻りたいという気持ちや、与えられた課題をひとまず自分は頑張ろうという気持ちを喚起したかもしれない。
池田 三鈴 課題研究A	課題研究Aでは、学外演習などをうまく活用しながら、緊急事態宣言中の休講・補講をうまく対面期間に組み込むことができた。少人数であるからこそできたことだと思う。また、休講期間中であっても作品アイデアや衣装イメージ、好きな音楽や風景など、さまざまなものへの表現要素としての視点を持ち過ごすようにしてきた。日常の中で、得られた作品のエッセンスや動きのイメージ、使ってみたい、挑戦してみたい表現などを持つ時間の余裕があったと思う。1週間に1度という定期的な活動ではなかったからこそ、得られる新鮮さもあったように思う。次年度も少人数であることをうまく活かしながら、遠隔の時期などを乗り越えることができればと考えている。
池田 三鈴 教職実践演習(幼稚園・保育所)	今期の教職実践演習では、密を避けるために、200名弱を2つの教室に分け、受講する大型講義形式と、18名程度で学ぶ小グループ形式を合わせた形での展開であった。特に大型講義は、目の前で話している教室と遠隔配信の教室では話し手から伝わる臨場感が違い、また学内通信の混雑などによる、不具合など、学習温度に違いが生じてしまう場面があった。できる限り、受講人数を配慮していただき、楷の木ホールを優先的に使用できるなど受講者に不利益が出ない学習環境を整えていくことが重要であると考えている。
石川 雅俊 日本国憲法	2021年度はオンデマンド授業であったが、オンデマンド授業に関する学生からの意見はおおむね好意的であった。ただ、「質問がしづらい。」という意見があった(なお、この授業は前年度もオンライン(リアルタイム型)で実施したが、その際にもこのような意見があった)。質問には即日チャットで対応していた。その結果、そのような意見は減ったものの、一部の学生からは依然として挙がってきている。オンデマンド型ではやはり限界があると感じている。
磯部 知愛 子どもの保健	学生の回答コメントからも、オンラインツールを活用し、ゲーム・クイズ式で復習を促したり、動画視聴を活用することにより、学生が意欲を持って復習し、達成感を得られる仕組みは効果的であったと考える。 また、遠隔と対面授業での差が生じることをないように、遠隔授業時でも資料提供型ではなく、オンラインライブ授業を実施し、対面に近い状態で実施したことも学修効果をあげたと考える。 ハイブリッド授業の際は、学内での通信環境により、通信が途切れたり、オンラインツールをその場で 学生が利用する学習が中断されてしまうことがあり、不便であった。幼児教育の現場でも、オンラインツールやデバイスの活用といったDXは進んでいるため、保育者であってもITリテラシーを待たせ、活用できる人材育成に繋がる教育方法が必要であると考えている。よって、そのような学習方法を実施していくにあたり、今後学内の通信環境の早期改善を望む。 今後も授業途中にも学生からの反応や意見を得て、改善していく仕組みを作っていきたい。

遠隔授業の課題—その対策と成果

磯部 知愛 子どもの健康と安全	学生の回答コメントからも、オンラインツールを活用し、ゲーム・クイズ式で復習を促したり、動画視聴を活用することにより、学生が意欲を持って復習し、達成感を得られる仕組みは効果的であったと考える。 またオンライン上での授業スライドや参考資料などの共有も学修しやすかったと好評を多数もらっている。共有のタイミングに関しては遠隔時も上記同様であり、今後検討していく。遠隔と対面授業での差が生じることのないように、遠隔授業時でも資料提供型ではなく、オンラインライブ授業を実施し、対面に近い状態で実施したことも学修効果をあげたと考える。 ハイブリッド授業の際は、学内での通信環境により、通信が途切れたり、オンラインツールをその場で学生が利用する学習が中断されてしまうことがあり、不便であった。幼児教育の現場でも、オンラインツールやデバイスの活用といったDXは進んでいるため、保育者であってもITリテラシーを待たせ、活用できる人材育成に繋がる教育方法が必要であると考え。よって、そのような学習方法を実施していくにあたり、今後学内の通信環境の早期改善を望む。 今後も授業途中にも学生からの反応や意見を得て、改善していく仕組みを作っていきたい。
磯部 知愛 課題研究A	遠隔時も、各自の意見やグループディスカッションなどで、周囲の意見を取り入れ、学生の興味を深めていく関わりを行った。オンラインをうまく活用し、マンツーマンで話せる環境作りであったり、集団でプレゼンテーションをしっかりと見ながら意見を言い合える場を醸成した。作業経緯や途中経過を教員と共有できるように、また、他者の興味やテーマを共有し、情報提供や意見交換などのサポートが学生同士でもできるように、Teamsの授業チーム内のクラスノートブックを活用した。また、次年度は他者の進捗も相互に把握できるような工夫もしていこうと思う。
糸山 昌己 外国語コミュニケーション(英語)	英語の授業であるので発音指導が重要であるが、遠隔授業だと全体での学生の反応が一度に確認できないのでその対策が課題である。その対策としてteamsの画面に学生全員の顔を出して学生の反応を確認したいが、teamsのシステム上の制約から学生全員の顔を出すことができない。
岩久 由香 保育者論	アンケート結果からは、自由記述含め、とりわけ読みとれる内容はなかった。教員側としては、対面授業が中心となる中、遠隔授業を受講する学生は少数となったが、遠隔授業においては、PPTによる資料の配布と課題の提出で習熟の度合いを測りながら進めた。また、動画等の配信も行うことで、より具体的な理解につながるよう配慮した。特に、対面授業が主流となるなかで、遠隔授業の学生がモチベーションを保ち続けられるように、個人的な質問等に対するフォローはチャットを通じて随時行った。ただ、遠隔授業においては、学習意欲があり、目的意識も高い学生の場合、一定の学修成果は得られるものの、対面授業に比べて協同学習の機会が得られないことが課題であり、対話を通じて得られる学びの体験をどのように確保していくのか、あるいはそれに代わる学習への取り組みなど、今後さらに工夫を重ねることが必要と考えられた。
岩崎 朋枝 子どもの食と栄養	前年度の反省を活かして、対面で実施した方が伝わりやすいことと、遠隔のほうが各自取り組みやすいことと分けて授業を用意していました。(例:調理実習は対面で班ごとに実施するより、それぞれが自宅で実施するほうが確実に調理体験が出来て各々の課題も明確にしやすかったです。)緊急事態宣言により急に遠隔になった時には、先の授業と入替をしておいた点は良かったと感じました。ただ、授業の順番が変わったことにより、段階を追った知識の習得はさせにくかったと思います。2021年度は対面でも遠隔でも対応できるよう、小テストもFormsを活用しました。これにより、実習で当日受講ができない学生にも別日で受講してもらいやすく、多くの学生に受講してもらえてよかったのですが、対面授業時にFormsで一斉に小テストを30分間受けてもらおうと、再読み込みになって白紙に戻る学生が出てしまうケースが何度も発生しました。また、学校の無料Wifi利用を勧めましたが、実際のところ、学生の半数は個人のWifiを利用していました。理由は学校のWifiだと遅くて困るということでした。無料の環境しか利用できない学生にとっては不利となり、ネットワーク環境により公平性を保てない点は問題だと感じました。問題点もありましたが、遠隔授業の良い面もありますので、2022年度も一部遠隔授業を活用できる体制を希望したいです。

遠隔授業の課題—その対策と成果

及川 夕美 音楽表現A	理論の授業は、教員側が質の高い資料や動画を準備して(技術も時間も必要ですが)誤回答や質問については個別にチャットで対応すればある程度は成立する、という手応えを感じることができました。しかしピアノ弾き歌い実技はなかなか難しく、音の間違い程度の指摘は出来ませんが、技術面を言葉のみで伝えることには限界があります。学生のインターネット環境にも左右され、音や映像が途切れる、フリーズする、等でカメラ位置や接続の確認をしているうちに時間が終了してしまい、その為後日別途で個別対応を行う、という事例もありました。実際にアンケートの自由記述でも「もうオンラインには戻りたくない」という意見も出ています。 教員がお手本の動画を送る、練習中の動画を送ってもらう、などの授業時間外での工夫を行ったことにより「オンライン授業の際にもスムーズにレッスンを受講できた」という声もありましたので、今後先生方とも情報を共有し、更に良い方法を探っていきたいと思います。
大國 ゆきの 教職実践演習(幼稚園・保育所)	私が担当したチームには、遠隔受講を申請した学生はいませんでした。学生からのアンケートにも遠隔授業に関する内容は記載されていません。ただし、全体で実施した数回の演習に関しては、「密」を避けて感染防止に配慮するために会場を分け、学生が座席の間隔を保って着席し、複数の会場をリモートでつないで実施するといった試みが行われました。 こうした工夫は感染防止のために有効である一方で、どうしても回線の不安定さによる切断や音声・映像が途切れるといった課題を生じさせました。個々人の技術ではいかんともしがたい問題もあり、ハード面での充実を期待しています。
大國 ゆきの 心理学	この授業は、上述したように、1コマしか開講していないところに100名を大きく超える学生が受講申請をしたため、急遽、オンデマンド型に切り替えた科目です。 切り替えを決めたのは授業担当者ではありませんが、この科目は卒業選択必修科目のひとつであり、2年次後期という最終期に開講されているため、受講する学生を抽選等で減らすことは卒業不可の学生を量産することになり非現実的ですので、この決定には納得しています。オンデマンド型で教養科目をどう教えるかは、様々な方策があると思います。 担当者としてもいろいろと検討しましたが、結論として、この授業では、テキストを定め、15回の授業に小分けして、その週の内容を学んだあとに本学のMoodleを活用して小テストに答え、各人が理解度を確認するというスタイルとしました。質問や相談には随時応じました。 授業担当者が独自に行ったアンケートからは、オンデマンド型であることが決定事項なのであれば、この方法で良かった・助かった・納得しているという学生の声が集まりました。情報の共有や説明を丁寧に行い、ひとり一人の声にも丁寧に答えていけば、学生は理解してくれるのだという印象を持っています。
大國 ゆきの 子ども家庭支援の心理学	今回の授業アンケートは、遠隔受講生とそれ以外を分けて集計されているわけではないので、自由記述に「遠隔受講生である」と明記してくれた1名のみに関してもありますが、「改善してほしい点」として「電波の関係で止まってしまうことが多かった」という回答がありました。リアルタイムで授業を行いつつ、遠隔受講生にはWeb会議を使って参加をしてもらうスタイルなのですが、時間帯によっては、回線の不調が繰り返して起こりました。カメラはオフにし、共有する画像もできるだけ軽くするのですが、キャンパス全体の通信回線の問題もあるようで、特定のいくつかの授業で問題が起こりやすいと感じました。 遠隔受講生と対面で授業を受けている学生とにできるだけ差異のない授業を提供しようとすると、どちらにとっても少し中途半端な授業になってしまうという印象があります。授業担当者の技術や力量の問題だけでなく、マシンやハードの問題もあり、悩み続けています。
大澤 洋美 課題研究A	・オンラインのノート活用が十分にできなかった。実践の結果をオンラインでも共有できるようにするとともに、学びの履歴を確認でき、課題研究のステップを作るこ都能够できるように改善をしていきたい。 ・オンライン・対面等の状況に合わせて工夫をして、学生の学びへの意欲に寄り添うことが出来るようにしていきたい。 ・オンラインの授業を有効にするためには、学生のPCの所有とオンライン環境の充実が必要であると思う。
大澤 洋美 教職実践演習(幼稚園・保育所)	・海外からゲストティーチャーを招くことにより、これまで難しかった海外の保育の様子をオンタイムで教習することができたことは、需要の幅を広げる大きな清雅であったと思う。今後もこのような機会を作っていきたい。 ・オンタイムで遠隔の学生の受講を可能に留守などの工夫をすることで共に学ぶことができた。 ・教員間でもICTを活用することによって授業の内容の差をなくすることができるように考えていきたい。

遠隔授業の課題—その対策と成果

大澤 洋美 保育者の言語表現	・オンラインと対面のハイブリットによる授業だからこそできる映像による授業や教材の提示と課題のバランス が学びへの意欲を高めた。一方、実践的なやり取りと対面ですることによって今年度は十分な成果を感じていたことから、オンライン授業では多くの課題があると考えます。
大澤 洋美 保育指導法演習	・今年度もオンライン授業が多かったがその特徴を生かし、教科書の読み込みから保育への深い理解を求めたことで、保育実践においても専門性を深めることが実感できたのではないかと思います。 ・オンライン授業では特に資料をシンプルにして、学生の取り組み時間に配慮してことが授業の理解や意欲につながると感じた。また、学生の学び方を想像しながら、意欲をもつことが出来るようにアプローチすることの大切さを感じることが出来た。制作の手順の説明については、自ら考えてほしい部分もあったために学生からは説明不足と感じるところがあったととらえている。制作の政策の中での目的を明確にすることで改善をしていきたい。
郡司 敦 課題研究A	昨年度はオンライン授業という制約の中でできる事が限られ、結果的に動画制作を行った。今年度は対面授業が見込まれたので、全員で楷の木ホールで発表するという目標を掲げる事ができた。学生のモチベーションの向上や表現を楽しむ経験を養う事に繋がったと考える。
郡司 敦 音楽表現A	今年度は昨年度に続き対面授業と遠隔授業が行われた。異なる点として今年度ははじめの2回が遠隔授業が行われ、その後対面授業が行われるという形であったため授業プランをどうするか、対策を練った。特にアンサンブルの授業の進行についてははじめの2回で導入を行い、対面になって実際に音を出しながらアンサンブルを実施するプランが機能するか、不安な面があった。学生が混乱していないかどうか気になっていたが、アンケートの結果をみるとおおむね良い結果であり、授業内容が改善され、アンケートの結果に反映されたと考えられる。
郡司 敦 音楽演習B	今年度は昨年度に続き対面授業と遠隔授業が行われた。今年度は異なる点としてはじめの2回が遠隔授業が行われ、その後対面授業が行われるという形であった。管楽器アンサンブル、打楽器アンサンブル、グループアンサンブル等のアンサンブルを中心に授業を実施したが、オンラインでアンサンブルをする場合は複数の人が同時に音を出す技術的な難しさがある事を改めて認識した。対面授業が多かった今期の授業の進み具合、アンケート結果の内容から遠隔授業よりも対面授業の方が成果があると考えられる。
郡司 敦 教職実践演習(幼稚園・保育所)	「実習で休んだ時のための課題がある時とない時があったため統一して欲しい」とのコメントがあった。遠隔授業では学生がTeamsを使用し資料を確認する事になるが、欠席者に対しても同様に課題をteamsから確認する事になる。このための事前準備を行い、欠席者用の課題の提示を統一しておく必要があったと考える。今年度は実習が延期になり、人によって実施日に違いがあったため、個別に対応する事が多かった。欠席者がteamsを確認した際に、一目でわかるような整理された一覧表があったほうが良かったと考える。今後も同じような事例が起こる事が考えられるので、改善点としたい。
後藤 悌二 障害児保育	遠隔授業と対面授業がミックスしたかたちであったため、シラバスの内容は踏まえながら、教授方法や順序など臨機応変に実施した。本来なら学生のグループ討議を取り入れたかったが、チームス上で各学生から意見を収集し、講師がそれを紹介しながらまとめていく形式を取った。個々の意見は大切にしたいつもりだが、学生にとっては演習として受け止めにくなくなったかと思われる。直接的なグループ討議と比べるとグループダイナミクスや、共同的解決能力向上には不十分となった。

遠隔授業の課題—その対策と成果

白山 智文 音楽表現A	遠隔授業の対策として、対面授業時から、いつ遠隔に移行しても良いように事前準備を進めていたため、結果的に大きなトラブル無く実施させていただくことができた。1年を通じての課題としては前期はピアノ、音楽理論ともオンライン試験を行なったが、音楽理論の試験作成に困難を伴った。対面試験同等の問題作成を目指したため、細かな画像編集や、対面で書いてもらう部分を選択肢で作成するなど、コンピューター上多くの作業が必要になった。この部分は複数教員で分担することが難しかったため、今後も作成する教員への負担の偏りが課題となる可能性がある。 一方、後期ははじめの2回を除いて対面授業であったため、希望者、申請者に対して遠隔授業をおこなった。前期の経験を踏まえ、後期試験では対面、遠隔を同時並行でおこなえるよう通常通りの試験作成をする一方、遠隔用に選択式問題を中心としたややオンライン向けの試験作成をおこなった。対面、遠隔を並行して進める手間はかかるものの、全体としては対面授業を基本に進めることができ、本来の授業形態に近づいた。 一方授業前後のメール連絡など、対面時においても引続き遠隔の手法を活用するメリットは大きいので、出来る限りきめ細かく指導するよう模索したが、行き渡らない点も多々あったと思われるので、今後の課題として取り組んでいきたい。
鄒 敏俐 外国語コミュニケーション(中国語)	遠隔授業は学生たち一人ひとりの自己コントロール能力が必要、授業中にすぐ集中力がなくなつて、授業についてこられない学生がいます。このことに対して、授業前になるべく丁寧に授業資料を用意して、ネットで共有することが大切だと思います。授業中に講師一人説明時間を短縮して、学生たちに共有資料を確認させて、発音と理解を最初に学生たちに答えてもらった結果、だんだん真面目に授業に参加できるようになりました。またオンライン授業の最大メリットは映像をふんだんに使えて、中国の文化、社会を簡単にリアルに紹介できる点はとても良かったです。オンライン授業を通して、一番大きな成果は学生たちは一人ひとり自学能力を育てられたと思います。
津久井 康明 子ども家庭支援論	今年度は結果的に対面授業と遠隔授業が混在する授業形態となった。そのなかでも、前期が遠隔授業の割合が多く、後期は対面授業の割合が多くなった。遠隔授業では、オンデマンド形式を中心として授業を行った。そのなかで見えてきた課題については以下の通りである。 まずは、学生の授業に対する取り組みの姿勢について、積極的な学生と消極的な学生とで、大きな差が出てしまうことである。積極的な学生の課題は内容が充実しており、動画をしっかりと視聴して自らノートをまとめている様子が伺える。それに対して、消極的な学生の課題からは、動画を視聴していれば容易に回答できる事項についても誤認していたり、内容が不十分なものが散見される。遠隔授業は対面授業に比べて学生の自主性に影響される側面が大きい。授業内容の向上はもちろん重要であるが、それと同時に学生が動画を確実に視聴したことを確認するシステムなども検討の余地があるのではなかろうか。 また、遠隔授業ではグループワークなどの演習形式の授業に制約が生じてしまう。この点については、リアルタイム・双方向型でブレイクアウトルームを活用するなど、様々な工夫を実践した。これにより、一定の代替をすることはできたが、やはり対面授業のコミュニケーションの密度には遠く及ばないことも確かである。講義形式の授業では遠隔授業が効果的である部分も多いが、演習形式の授業は可能な限り対面で行うことが必要であると思われる。
土屋 朱帆 幼児音楽	後期において幼児音楽の遠隔授業は、最初の2回のみでした。遠隔授業では、同時双方向型の形式をとり、学生もカメラオンで参加させていたので、さほど不都合を感じなかったが、“こどもの歌をみんなで歌う”という授業内容の際に学生のマイクはオフなので、学生の歌声は聞こえず、どんなところが歌いにくいのか、わかりにくいのか、という点がつかみにくかったです。その対策としては、授業の中でこちらからこまめに声掛けをしたり、個別に指名して声を聴かせてもらうことで対策をとってきました。成果としては、そのおかげで学生自身に緊張感も生まれ、より授業に集中してもらうことができたように感じます。
寺田 清美 乳児保育Ⅱ	対面授業では演習に相応しくオムツ交換・授乳・玩具の置き方・保育者としての立ち位置等実践に即した授業展開したことが学生には好評だった。 学生の感想はとても丁寧に書かれていて教員として励まされる思いである。予習した学生には良くわかる授業であったという感想が多く見られた。個別感想の中にもっと実践的な内容を学びたかったという感想が見られ、対面時の工夫を考える必要があるが、同時に保育シミュレーション教室を利用できるクラスとそうではない学生との違いをどのように埋めていくかが課題であると思われる。

遠隔授業の課題—その対策と成果

寺田 清美 幼児理解の理論及び方法	遠隔授業利用者と対面授業利用者がいるため、対面授業とオンライン授業を96名の学生に伝えながら同時に実施することの難しを感じた。対面授業参加者も実習日数が多いことから煩雑なことが今年の特徴である。TEAMSに授業内容を提示し、課題の解説も全て後日提示した。幼児理解は問題に対して解決策を見つけていくことも多い為、理解度の低い学生への対応を昨年より今年は多く感じた。
寺田 清美 教職実践演習(幼稚園・保育所)	19人中1人、遠隔授業参加者がいた。とても努力している様子が伝わり、毎回授業終了後に課題が提出されてきた。理解力もあり、19人という小人数の場合であれば、対面授業と遠隔授業とのMIXであってもスムーズに展開できるように感じる。園見学は難しいがオンデマンド型であればその対応も可能である。次年度は全て対面授業の予定であるが、実習等で欠席した学生のためにもTEAMS利用は次年度もあるほうが良いと感じている。
永井 優美 課題研究A	遠隔授業の一番の弊害はコミュニケーションの難しさにある。今回のゼミでは遠隔授業より対面での授業が多かったため、その弊害は最小限に抑えられたのではないかと考えている。とりわけ共同研究を行うにあたってはコミュニケーションがとりやすいことが最重要課題である。また、クラスは2クラスにわたり、同じクラスであってもほとんど接点が無かった学生たちは、まず人間関係を作ることについて苦慮していた。しかし、この人間関係が成り立たなければ共同研究は行えない。それぞれの担当箇所を仕上げれば研究が進むのではなく、常に話し合い、意見を出し合い、それぞれの担当箇所を関連づけなければならないからである。そのため、一回でも遠隔授業になってしまいますと、対面で話し合う機会が減るため、学習成果には確実に影響を与えることは否めない。しかし、今回は6名のメンバーという少人数指導であったことで、チームとしての研究は成り立った。遠隔授業にした際には、一人ひとりの学習状況を確実に把握するため、Formsなどを用いて授業の進捗や感想を集計した。そのため、一回の授業としての質が確保されていることが常に把握でき、それに少し足りないと感じる点に関しては次の授業でフォローをすることで確実に授業目標を達成することができたと考えている。
永井 優美 教職概論	遠隔授業に際しては最新の注意を払って取り組んだ。これは対面で授業をするよりも大変難しいことで、学生の反応は見えにくいことから、学生の学習成果をForms上などで随時確認した。その結果、遠隔授業も有意義に行うことができたと考えている。実習直前には実習の雰囲気をつかむため、園での一日の生活がわかるように映像を合法的にアップすることができたが、その方法が複雑で非常に準備に時間を要した。対面ではないような手間がかかった。また、その映像の感想は他者と共有することができず、教員への感想という形でまとめざるを得なかったことが残念である。実習前の不安や心配を授業後に友達と話すきっかけになっていたであろう映像であるが、授業としては成り立っても、授業後の学生の自主的な交流への影響まで考えると、限定的な成果なのではないだろうかと感じてしまう。したがって、遠隔授業は内容的には充実していても、教員がコントロールしていない部分での学生の自主的なコミュニケーションを伴った学びの進展については、マイナスな面もあると言えよう。また、常に遠隔授業を受けている学生に対して、オンラインで毎回授業を提供することは大変であった。回線の都合で接続がうまくできないなど、個人の努力ではどうしようもないこともあり、遠隔授業を受けていた学生のコミュニケーションの質も対面の学生に対してはどうしても落ちてしまいますことから、まったく同じ質の授業を提供することは難しいと感じた。
永井 優美 教育原理	毎回遠隔授業での参加を許可されている学生がおり、その対応のために、対面で行っている授業に支障がでることがあったことが悔やまれる。遠隔授業の際に回線トラブルなど個人の努力ではどうにもできない点、また教員は情報機器に関する専門家ではないため、そのようなことに関しての学生からの質問がくるのも大変困った。教員としては授業を成立させるために、これまで授業の内容に集中していたエネルギーを不慣れな情報機器の操作に使わざるを得ず、その点で授業の質が低下していないか不安になることもあった。全員が遠隔授業を受ける回では念入りに事前準備を行い、資料提供型の授業を行った。その反応を見るために必ず課題を出し、学生の学習状況を把握した。個別学習になることから、しっかり取り組む学生と、そうでない学生との差が対面以上にできるように感じられた。資料提供型でどこまで理解度があるか最初は不安であったが、想像以上に学生がよく課題に取り組み、隅々まで資料を読み確実に専門的知見を身につけている様子を見ると、いかに学生の視点にたった事前準備が重要であるかがわかり、自信をもつことができた。

遠隔授業の課題—その対策と成果

中川 瑞葉 音楽表現A	前期の遠隔授業では音楽理論の内容を授業動画として配信し、課題をformsで回答させるというものでした。動画を好きなタイミングで何度でも見直せるので、実際にピアノで弾いてみる課題に関しては、動画内で弾いている演奏に合わせて学生も弾き、わかるまで・できるまでやり直しができることが良かったと思いました。formsでの解答に誤りがあった場合にはチャットで個別に再解答を求め、理解が足りない部分に関してもフォローをすることが出来たので、毎回の授業で取りこぼしがないようにチェックすることができました。 ただどうしても試験がオンラインとなることで、資料等を見ながら試験を受けられるようになってしまったため、本来求めたい内容の試験の課題が作れなかったことが残念でした。 後期は対面での授業が行えたことは良かったですが、実習などの影響で欠席になった場合はその日の授業内容を理解しないままに先へ進むことになってしまうので、取りこぼしてしまうと感ずる場面がありました。後期の期末試験は対面で行えたことで、内容も充実できて学生の理解度もよく把握することができました。ピアノの実技においては、対面であるに越したことはありませんが、オンラインでも十分に授業として成立していたように思いました。
永田 陽子 環境領域指導法演習	対面授業の中に遠隔授業の学生さんがそれぞれ1名、3名と入っていたので、とてもやりづらかった。理由は今年はDVDを中心に保育を考察していくことを中心にしたので、遠隔の学生さんには細かく内容を伝え解説していったが、伝えきれなかった部分が多々あったのではないかと反省する。ただチャットにあげてくれた学生さんとは、個別に対応していったが、上がってこない学生さんとの接し方を考えていく必要性を感じた。
能渡 綾菜 教育相談の基礎と方法	遠隔授業の実施は今回が初めてではなかったため、これまでの遠隔授業で手応えのあったことを再度取り入れるようにしていた。授業動画については、パワーポイントなどの視線誘導のしやすいツールを用いること、再生速度を選べるようStream機能を使用することが理解度の高さにつながっていたと考えられる。また、遠隔授業は出席確認のために多くの課題を課す必要が出てきてしまうが、感想記述形式や確認クイズ形式など、いくつかのパターンを取り入れることにより、学生の負担が軽減されていたと考えられる。小テストについては、学生同士が相談しながら回答できるという問題を想定し、初めから授業資料を見ながら回答する小テストとして設定した。また、実習期間と重なってしまう場合も想定し、得点配分の高い小テストや課題の締切を3週間後に設定することで、多くの学生が提出することができていた。 その一方で、オンデマンド型の遠隔授業で十分な対策が講じられなかったこととして、授業資料とWeb資料の境界の曖昧さが挙げられる。対面授業時のレポートと比較し、遠隔授業時はWebサイトの文章をそのまま記述する学生が多くなっていた。PCやスマートフォンの画面越しに伝えた授業内容は、学生にはWeb上の情報と一続きになっているように感じられ、自分の体験としての咀嚼が難しく、単なる情報として処理されてしまったのではないかと考えられる。
馬場 康宏 幼児と人間関係	今学期は新型コロナ感染拡大防止の観点から序盤の数回は遠隔授業の形態で、それ以降はすべて対面授業により行われた。遠隔受講申請制度により毎回、また、ワクチン接種にかかわる理由により遠隔授業で受講する学生が度々いた。 遠隔授業期間においては、Microsoft Teamsの授業チームによる教材・資料配布型で行った。また、対面授業期間中の遠隔授業は、各回の授業内容によってリアルタイム・双方向型と教材・資料配布型を使い分けた。対面授業週に遠隔受講許可が認められている学生に対しては、専用のプライベートチャンネルを作って指示や課題の割り当て等の対応をすることで、その他一般の学生が混乱しないよう配慮した。
馬場 康宏 青年心理学	今学期は新型コロナ感染拡大防止の観点から序盤の数回は遠隔授業の形態で、それ以降大部分は対面授業により行われた。遠隔授業は、Microsoft Teamsの授業チームにより、基本的にはリアルタイム・双方向型で行い、授業内容によっては教材・資料配布型も併用して行った。 リアルタイム・双方向型ではビデオ会議システムを用いて、通常の対面授業と同様に板書、図表、論文等の資料を画面共有による提示、「ファイル」により配布しながら講義を進めた。 問5(良かった点)として、一人ひとりの意見を述べる機会を与えたり、リアルタイム・双方向の講義であったことが自身で考えメモをとることで内容理解が深まったとの記述があり、少人数であったことと対面授業に近い授業で進めたことが学習成果の達成に活かされたと思う。
福山 多江子 課題研究A	遠隔授業に関しては、ゼミに関して、作成時間を授業時間内に設定し、オンラインで作品を作成前と後ということで、写真を撮ってもらい、前後で進捗状況が把握できるようにした。それにより、オンラインでも作品を製作した進捗状況が把握でき、その対策としてはよかったのではないと思う。

遠隔授業の課題—その対策と成果

福山 多江子 教育実習指導	パワーポイントは、理解しやすいように作成に関しては気を付けたつもりである。ほとんどの学生は、理解ができていたようである。ただ、もう少し説明が必要であると感じるところを音声も含めてPPTに入力することでより理解しやすくなったのではないかと考えるため、次回は、もう一工夫、音声を入力したPPT作成を心掛け、より良い授業を展開していきたい。
藤川 志つ子 障害児保育	今回のアンケート結果には反映されていないが、遠隔授業中「チャット」での質問回答へのフィードバックは必ず全員に行った。その結果、学生から「授業に参加している」という意識が高くなり、自分の意見がきちんと届いている安心感があったとのコメントがあった。遠隔授業では事前に資料をPDFで用意していたが、学生によってはPDFをプリントアウトできない・確認しないで授業に参加する学生も散見され授業内容の理解に差が見られた。遠隔授業では学生の集中時間の差が理解に直結するので、時間配分を考慮(短いスパンで回数多く)しながら今後の授業展開を考えたい。
藤村 秀子 音楽領域指導法演習	遠隔授業を行う際、全てリアルタイムで行ってきている。 通常授業と同じく、はじめに出席を取りチームズのクラスノートブックを用いてレジメを配布している。 グループでの話し合い、発表、等取り入れているが、音楽授業であるため、楽器を鳴らすことができないことに歯がゆい思いをしている。幼稚園等で使うリズム楽器の持ち方や音の出し方は、学生がその楽器を持っていないため、遠隔では実技として行う事はできないので、ビデオを見るだけになってしまう点をどのようにしていくか、実際の所かなり難しいのではないかと感じている。 音楽を用いた遊びもビデオを観るだけとなり、実際にやってみてわかることも多々あることから、今後どのように対応して行くべきか、手探り状態ではあるが、見つけていこうと思う。 レジメに関してだが、受容だと思われ空白を空欄を用意し、穴埋め形式にしている。 受動的な授業ではなく、少しでも能動的になって欲しいと思い、そのようにしている。だが、それだけではやはり、授業を受けているという気持ちにはほど遠いだろう。今後は、発表の機会を授業の中で取り入れ参加型の授業へと進めていけるように行っていこうと思う。
堀内 秀雄 教職実践演習(幼稚園・保育所)	教職の実践に関する学習の卒業前の再確認として演習形式で行われるべき科目であるが、感染防止の観点から、遠隔授業を行わざるを得ない部分は是認しなければならない。そこで対面での演習に必要な環境をどのような形で遠隔授業で実現していくか、遠隔授業経験2年目ということもあり、オンラインでの小グループミーティングなどをセットしたグループワークなどが行われ、演習としてのアクティブラーニングも実施できた。このことは学生からも評価するコメントがアンケートの自由記述の回答にあり、学習成果と考えることが出来る。また、この授業と並行して実習を行う学生もあり、これは時期として学生それぞれということで、ここへの対応としてオンデマンド式遠隔授業が用いられた。多くの学生がこの方法で実習欠席分の教職実践演習授業を履修でき、欠席を防ぐことが出来たのは大きな成果である。ただ、ここでの実習欠席授業課題の提示がやや不明確な部分もあり、今後は実習欠席課題の更なる充実と提示・提出方法などについて、もう少しきめ細かいシステム化された対応が必要である。教職授業の集大成として行われる授業で、もともとカリキュラムそのものが教職に向けた構造となっているので、どの科目が教職実践演習のどの企画に集約されているのか、構造の明確化が必要と考える。
堀内 秀雄 課題研究A	今年度後期はあらかじめ遠隔授業日が決定しているということではなく、市中の感染状況である意味突然遠隔授業に切り替わる形で授業が進められた。このことはある意味仕方ないことかもしれないが、授業形態によっても異なるだろうが、演習授業では授業効果を確保するためには遠隔授業と対面授業ではその組み立て・進行・準備などが異なってくる。そのため今回授業では、制度上可能な範囲であらかじめ遠隔授業を確定し、対面授業での十分な準備の下に遠隔授業を行った。学生の実習などの事情で授業への出席が出来なくなる場合などに、遠隔でオンデマンド型で課題を進めていく、こうした遠隔授業の利用も行い授業欠席への対応として有効であった。このように対面授業の補完的位置づけで遠隔授業を行うことは一定の工夫でそれなりの効果得ることは可能であったが、「遠隔授業ならではの授業効果」をより積極的に生み出す方法論の開発が必要である。対面での会話が感染防止の観点で制限を加えざるを得ず、そうした意味で遠隔を利用するなど、「遠隔授業だからできる効果的授業とは」について、十分な効果検証を行いながらさらなる授業改善を進めていきたい。

遠隔授業の課題—その対策と成果

堀内 秀雄 造形表現B	造形授業を遠隔で行うことは、映像で作品制作の方法、評価を行えば可能なようにも思えるが、実際に半期の授業展開とするには様々な問題が生じてくる。例えば制作に使用する道具はどうするか。材料は、参考資料・作品の提示は、制作過程の態度姿勢についての指導は、などなど、オンラインだけでは対応できない様々な問題が生じてくる。今回も、遠隔授業で造形授業を希望した学生には、別途都度都度材料道具を送付、また視聴可能な映像制作を行い対応したが、やはり対面の授業効果を遠隔で保証することには限界があった。特に粘土の造形ではもともと3次元での着眼点、発想を柱とした造形であることが基本となるが、オンラインではどうしてもこれが2次元となり、空間的理解につなげていくことが難しい場面がいくつかあった。また、作品提出においても、映像では通信容量の制限の関係もあり、多くの画像のやり取りは難しくなり、送信側の学生が気づいていない視点、着眼、工夫を発見し評価することが難しく、制作の適時のアドバイスに限界があった。それだけに、造形作品制作の意義、ポイント、自身の態度等をレポートの中で意識化させ、ただ何となく面白そうだから作った、ではない目的意識のはっきりした造形表現が可能となったことが一つの大きな成果であるとする。そうした意味では「造形表現」のねらいはただ作品を作ればよい、ではないことを伝える良い機会になったのではないかと考える。
松本 純子 課題研究A	何度か遠隔で絵本の紹介やグループ協議を行った。遠隔であってもグループ設定することで顔を出して絵本を紹介したり自分の考えを伝えたりすることができ、ゼミ仲間の人間関係を高めることができたことは成果であったと考える。しかし、絵本という教材の特性もあり、画面が十分に見えない・読み手の息遣いが感じられない・色が美しくない等の問題があり、物語を伝えることはできても絵本の魅力を十分に伝えきれないもどかしさが残った。特に学生がスマホで受講しているためにこの課題は解決が難しく、遠隔授業での達成感の低さ・未消化感は否めなかった。
松本 純子 教職実践演習(幼稚園・保育所)	実習等で欠席しなければならない学生も多いたが、欠席者用課題をきちんと提出しており、この授業に対する意識の高さは伺えた。しかし、実践的内容の授業であったため、遠隔受講者1名については園見学・グループ協議・ロールプレイング等の機会を他の学生と同じように設けることができず、代替座学中心の学びになってしまった。対面で体験できるものと同等のことを保障する難しさを感じている。
松本 純子 保育内容総論	遠隔受講者はクラスの仲間とのグループ演習ができず、遠隔受講者専用のチームを作ってグループ演習を実施した。一人でだれとも連絡を取らずに受講している状態からは脱することができ、ある程度の効果は挙げられたと考える。しかし、対面で実施することで伝わる技能や意見交換ができにくかったことは、やはり授業への意欲や人間関係の深まりの点で問題が残ることとなった。
松本 紀子 保育実習指導 I	初めての保育実習に向けて、授業内でできる最大限の体験型の学びを園かkでどのように提供できるのかということは大きな課題である。仮にビデオを見せて援助や部分実習の進め方を考えさせても、机上と実際とでは天と地ほどの違いがある。特に対子ども、対職員とのコミュニケーションにおいては、経験を積み重ねていく以外スキルアップを図ることは困難である。しかし、リアルタイムのオンラインは通信障害が発生するとその時間が受けられないことになり学生にとって不利益となる。遠隔という手立てをとりながらも自宅で演習として取り組み、現場で力を発揮できるよう実習日誌の書き方と添削、子どもの数枚の写真を見てその子どもの思いをイメージし対応を考えるというより実践的な遠隔授業を行ってきた。
松本 紀子 乳児保育Ⅲ	演習という授業を遠隔で行うことの難しさがある。そのため、シラバス通りの振興ではなく、個人の学びを深めるものと集団の力を発揮して取り組みを進めるものとに分け、遠隔では個人で学ぶ内容を行ってきた。保育者として働くことが目前に迫っている2年生にとって、即実践につながる経験を対面授業で行うことにより、個人で学びを深めてきた遠隔授業が更に役立てられたのではないかとと思う。
矢澤 由紀 情報機器の操作	今年度は対面授業を基本として一部遠隔授業を行うという状況であった為、常に対面・遠隔の両方に対応できるよう準備が必要だった。遠隔授業は教材・資料配布型で行い、対面授業の場合も、遠隔授業向けに作成した授業資料を使用した。問5・6の自由記述欄では、授業資料や説明が分かりやすかったと概ね好評で、分かり難かったという意見は遠隔授業が中心であった前年度に比べて減少した。しかし減少はしたものの、遠隔授業の場合は難しく感じたという意見もあった。授業資料については、前年度、受講生から質問が多く寄せられた箇所を中心に説明文等の見直しを行ったが、やはり文章や図の説明のみでは伝わり難い部分もあり、動画を活用する等、更に改善が必要なのである。加えて、分かり難いと感じた時にすぐに質問や相談ができるような環境も整えていく必要がある。

遠隔授業の課題—その対策と成果

安見 克夫 言葉領域指導法演習	演習科目のため、制作物の作成提出・発表という過程が多く、シラバス通りにスムーズに展開していくためには、基本的に全回数を遠隔か対面かに統一する必要があるかと思います。ハイブリットは、双方にとって良い点も多いが、授業効果はあまり期待できない点がある。特に資格・免許に係る実習が間に入ると、遠隔授業の場合、授業に参加する学生自身が、実習のため、課題の提出が大幅に遅れることによる、実習中の課題が次々としわ寄せとなり、一科目に留まらず、提出物が山積してしまう。時間的に余裕がなくなり、学ぶことより提出に向けて作業的になっていることが感じられる。よって、学生を苦しめてしまうこととなる。改善するためには、制作物の課題提出を延期するのではなく、全学的に、シラバスを対面式用と遠隔式用の二つを作成しておく必要があると考える。
安見 克夫 課題研究A	遠隔授業の場合は、フィールドワークが可能であるか否かの判断が難しい。なぜなら遠隔授業でありながら学生がバラバラに実習に出ていくため、自己課題に対する記録収集が途切れてしまい、継続的データがとれないこととシラバスでは対面を前提に作成しているため、対面式以外の授業形態に変更された場合は、直接学生に不利益が発生する。つまり、自己課題を遠隔用と対面用と二つ設定し、どちらに転んでも、自己研究課題に取り組めるよう指導するのである。しかし、一度どちらかを選択してしまうと、遠隔から対面に戻ったときや、対面から遠隔になった場合、学生は、かなりのリスクが生ずることとなり、演習科目には、遠隔授業やハイブリット方式は、難しいと感じる。
安見 克夫 教職実践演習(幼稚園・保育所)	この授業は、欠席及び実習で欠席した場合でも、すべて欠席課題が課せられており、どちらの方式でも、学生が自己欠席及び実習等で欠席した場合、課題提出を理解していることから、遠隔授業において特に混乱することはない。ただし、学修成果としての取り組みは、「演習ノート」の提出だけでは難しく、保育者としての資質と能力を測定する確かな方法を検討する必要がある。
吉田 博行 課題研究A	本授業は、対面と遠隔授業を併用した。できる限り対面で行い、学校の指示により遠隔授業とした。遠隔では、リアルタイム授業を中心とした。本授業は少人数で、フィールドワークや調査を中心としている。よって、今後も対面を主体としても、状況により適宜、遠隔による授業の方法を取り入れたい考える。
吉田 博行 社会的養護 I	対面と遠隔授業を併用した。基本的に対面授業として、学校の指示により遠隔授業とした。遠隔授業においてもパワポと授業ノートの作成を行った。小テストの実施と解答例を提示した。随時、必要に応じて、チャット等での問い合わせや個別の対応にも心がけた。
渡邊 晶 保育カリキュラム論	遠隔授業では資料提示型の形式を採用した。資料ををきちんと読んでから課題に取り組んでいる学生さんと資料を全く読まないまま課題に取り組んでいるであろうと推測できる学生さんが見られた。これは教員側の課題の出し方の工夫が必要なのではと感じ、改善するように試みた。また、遠隔授業では学生さんの授業態度や学ぶ姿勢などが直接見れないという事が残念であった。

【４】 アンケート結果の分析と評価

本アンケートは、全科目、全教員での実施を基本としている。2021 年度のアンケート対象者（履修者数）は、9,077 名（前期・後期）であった。うち回答者数は、4,889 名で、回答率は、53.8%であった。

本学における該当科目、該当教員のすべてにおいてアンケートを実施した。本年は WEB アンケートとして、学生による回答は、ネットを通じて学外の委託業者に送られ、集計が行われた後、企画・IR 室を経由して担当教員に科目単位で結果が通知された。

なお、同一科目を複数教員が担当した場合は、担当者単位で集計・通知を行い、コメントも依頼した。

① 科目開設時期による分析

2021 年度のアンケートの東京成徳短期大学幼児教育科全体の科目開設（アンケート実施）時期による結果（平均値）は、下表のとおりである。

なお、参考として（ ）内には 2020 年度の平均値を示す。

	質 問 内 容	前 期	後期(通年科目を含む)
問 1	授業目的の理解	4.59% (4.54%)	4.62% (4.59%)
問 2	授業姿勢	4.57% (4.57%)	4.60% (4.58%)
問 3	授業内容の理解	4.41% (4.31%)	4.47% (4.41%)
問 4	修得・向上できたもの(教育目標、カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーに対する回答)	次の表のとおり	
問 5・6	自由記述	各科目で集約	
問 7	学修成果	4.46% (4.31%)	4.54% (4.39%)
問 8	選択・自由設定質問	各科目で集約	

問 1 「授業目的の理解」では、高値を示し、授業目的の理解は達成できていると考えられる。

問 2 「授業姿勢」についても、同様に高値を示し、学生は授業に真剣に取り組んだと評価できる。

問 3 「授業内容の理解」についても、前年度比、増加傾向であり、高い評価と考えられる。

問 4 「修得・向上できたと思われるもの(教育目標及びカリキュラムポリシー・ディプロマポリシーに対する回答)」の結果は以下のとおりであった。なお、今年度から選択肢を見直し、以下のア～クに改めた。

修得・向上できたもの	前期	後期(通年科目を含む)
ア：教養・美しい心	39.6%	43.1%
イ：専門的知識・技能	76.1%	78.5%
ウ：研究意欲	25.4%	25.4%
エ：保育や子どもに関わる 実践力・即応力	63.7%	58.7%
オ：保育者に求められるコミュ ニケーション能力	42.1%	41.3%
カ：学びを深めるための協同的 課題解決能力	30.4%	31.2%
キ：社会的な責任感や倫理観	37.7%	33.2%
ク：目的に向かう意欲・行動力	36.6%	30.9%

この数値は、分子をア～クそれぞれの選択回答数、分母を全回答者数として得られたものである。ア～クは、すべて教育目標・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーから抽出された本学幼児教育科の柱となる項目である。学生には学習目標ア～クの中から 2 個以上選択を求めた。

うち、「専門的知識・技能」については、前期 76.1%、後期 78.5%と他項目と比較し高い値を示した。よって、多くの学生が専門知識・技術の修得を実感していると考えられる。

次いで「保育や子どもに関わる実践力・即応力」についても、高値を示した。

問 5・6 は、記述回答とした。

問 5 は、「授業（オンラインを含む）・資料・対応などで良かった点」、問 6 は、「授業（オンラインを含む）・資料・対応などで改善してほしい点」とした。各授業に対する具体的な学生の記述回答を報告し、今後の授業改善に活用できるよう各授業担当者へ報告した。

オンライン授業は、昨年度から始まった取り組みであり、授業への取り組みや方法に苦慮した点もあったが、今年度は改善した点も見られ、今後のより良い授業に向けて、授業のあり方を考える機会となった。

具体的内容は、各教員のアンケート結果のコメント、授業改善を参照していただきたい。

問 7「この授業を履修して、幼児教育科の専門分野での考え方や知識、技能が身につきましたか（学修成果）」は、この授業アンケートで最も重視したい項目である。問 7 については、前期は、4.46%（前年度:4.31%）、後期は、4.54%（前年度:4.39%）であった。

問 8 は、設定質問とした。各授業担当者が自身の授業効果として確認したい項目を独自の視点から設定していく質問であり、各教員の授業に込めた理念が現れる部分である。担当者が授業を通して何を最も伝え、授業を受けた学生に評価して欲しいと考えているのか、教授

ポリシーが現れる部分でもある。問 8 の具体的内容は、教員コメントの中でその結果と活用を参照いただきたい。

学修成果を学生自身がどう感じているかは、授業評価を通して教育開発研究を行う上で、最も大切なポイントであると考え。本学の「授業アンケート ―より良い授業を目指して―」は、こうした視点から、学修成果を高めるために工夫を重ねてきた成果である。

2021 年度の授業アンケートは、結果の集計に際して、学修成果が特に高い(5) グループ、高い(4)グループ、学修成果が比較的低い (3・2・1) のグループに分けて、問 1・2・3・8 の得点をクロス集計して示した。実効性に関しては、各教員のコメントを参照いただきたい。

② 科目種別による分析

2021 年度 授業アンケート―より良い授業を目指して、では必修科目、卒業必修科目、選択科目について集計した。

必修科目の履修者数は、923 名、回答者は 709 名で、回答率は 76.8%であった。

卒業選択必修科目の履修者は、1163 名、回答者は、453 名で、回答率は 38.9%であった。

選択科目の履修者数は、6991 名、回答者 3727 名で、回答率は 53.3%であった。

アンケート結果は、下表のとおりであった。

なお、() は 2020 年度の平均値を示す。

	質問内容	必修科目	卒業選択必修科目	選択科目
問 1	授業目的の理解	4.60% (4.53%)	4.62% (4.53%)	4.61% (4.57%)
問 2	授業姿勢	4.60% (4.56%)	4.63% (4.52%)	4.58% (4.59%)
問 3	授業内容の理解	4.46% (4.37%)	4.48% (4.33%)	4.43% (4.34%)
問 4	修得・向上できたもの (教育目標、カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーに対する回答)	次表のとおり		
問 5・6	自由記述	各科目で集約		
問 7	学修成果	4.51% (4.34%)	4.46% (4.28%)	4.50% (4.35%)
問 8	設定質問なし			

問 1 から問 7 の全般にわたり、平均値は、高値を示した。

幼児教育科の学生のほとんどが保育者を目指しており、どの授業も大事な科目として取り組んでいることと考えられる。

問 4「修得・向上できたと思われるもの(教育目標及びカリキュラムポリシー・ディプロマポリシーに対する回答)」に関する結果は、以下のとおりであった。

修得・向上できたもの	必修科目	卒業選択必修科目	選択科目
ア：教養・美しい心	50.1%	30.7%	41.1%
イ：専門的知識・技能	69.3%	79.2%	78.7%
ウ：研究意欲	42.0%	21.4%	22.8%
エ：保育や子どもに関わる 実践力・即応力	47.4%	32.9%	67.2%
オ：保育者に求められるコミュ ニケーション能力	36.1%	22.1%	45.1%
カ：学びを深めるための協同的 課題解決能力	34.0%	17.7%	31.8%
キ：社会的な責任感や倫理観	38.4%	11.7%	37.7%
ク：目的に向かう意欲・行動力	36.5%	30.9%	33.4%

アの「教養・美しい心」とキの「社会的な責任感や倫理観」の数値は、必修科目において高い値を示している。必修科目は「豊かな人間性と社会性を育てる」科目で、科目種別設定の企図と結果との間に整合性が認められると考えられる。

イの「専門的知識・技能」は必修科目 69.3%、卒業選択必修科目 79.2%、選択科目 78.7%であり、他の選択項目と比較し高い値を示した。よって、多くの学生が専門的知識・技能の修得を実感していると考えられる。特に選択科目に関して数値が高いことは、「保育の実践力と即応力を育てる」「確かな専門的知識と研究意欲を育てる(資質の高い専門家を養成するカリキュラム)」という科目種別設定の企図との間に整合性が認められると考える。

ウの「研究意欲」については、特に必修科目において高い数値が認められた。このことは、卒業必修科目とされる 6 科目の中に「課題研究 A」「課題研究 B」という研究実施とその成果発表・報告を重視する 2 つの科目が含まれ、それが卒業必修科目全体の 3 の 1 にあたることによると考えられる。

エの「保育や子どもに関わる実践力・即応力」オの「保育者に求められるコミュニケーション能力」は科目種別設定の企図どおり、選択科目において最大値を示した。

カの「学びを深めるための協同的課題解決能力」は科目種別設定の企図どおり必修科目と卒業選択科目において高値を示した。

クの「目的に向かう意欲・行動力」はすべての科目が平均的な値を示した。

このように、学生が実感している学びの成果は、概ね、本学が企図した科目種別の特性と合致している。

なお、問 5・6・8 ついては、該当する科目の各教員のアンケート結果に対するコメント及び授業改善を参照していただきたい。

終わりに

爆発的に広がった新型コロナウイルス感染症は、全世界に広がり、すでに2年が経過しました。

誰もが、そろそろ終息に向かうのではないかと思います。生活文化・社会経済・学校教育などのすべての暮らしが一変し、一変した生活が、新たな生活になりつつある中、学校教育も、遠隔授業体制と教場での授業とのハイブリット方式を取り入れ、新たな教育方法が模索されてきました。

特に高等教育は、自主的・自立的な質保証への取組を推進しております。国際化により、諸外国からの留学生などに対して日本の高等教育の質の高い基準が求められていることから、今までの国内競争での大学ではなく、グローバルな視野に立ったダイバシティを取り入れた教育の拡充が求められています。

そのため、短期大学では平成20年度から短期大学設置基準に義務化されたFD活動を通して、様々な取り組みがなされてきています。

本学では、全学的IR企画室を中心に、短期大学は学務部FD委員会によって、授業法の改善等の取り組みがなれています。

特に学務部FD委員が力を入れている、「学生との座談会」では、教員とクラス委員が対面する中で生きた意見交換は、大きな意味を持つ成果であると評価しています。また、毎年実施されている「学生による授業アンケート」結果に対しての各教員からのコメントは、個人及び科目の学修成果を見直し、新たな授業改善への取り組みの契機となっています。これらの成果は、2020年度は、短期大学認証評価機構での自己点検評価「授業効果・学修成果の査定」として検証評価され、その結果昨年度9月に「適格」であることの認証を受けました。

2021年度も引き続き、内部での検証を行っています。しかし、新型コロナ感染の拡大に伴い対面授業を中心に、遠隔リモート授業にも対応しながら進められました。こうした中で、「学生による授業アンケート」の結果については、ディプロマポリシーである「専門知識・技術」は、他の項目と比較した場合、「学習成果が上がった」と答えた割合は、昨年度67.7%に対して今年は、ハイブリット授業により69.3%－79.2と、2ポイント以上高い結果が示されました。

意外にもハイブリット型授業でありながら、「授業目的」・「授業内容の理解」及び「授業姿勢」などは、前年度より高く、特に、「授業姿勢」が、前年度を大きく上回ったことは、学生ひとり一人が真面目に、真摯に取り組んでくれたことと、教員の授業改善と丁寧な学修指導の賜であった結果であると感謝すると共に心より御礼申し上げます。

その他については、FD委員会が結果について考察しているので参考にされ、今後の授業改善の一助にさせていただきたいと思います。今回の学生によるアンケート結果については、各科目において様々な幅があり、それぞれの科目の特徴や授業形態等によって、その評価は異なると考えられます。授業者の授業法改善が、年を追う毎に工夫されていることが見受けられます。今後に向けて、学生によるアンケート調査や教員同士の授業参観など、FDの取り組みを多重化していくことで、さらなる授業改善につながり、高い学修成果が得られることを期待したいと思います。本学の質の向上に向けて、総合的FD活動のアセスメントを行うと共に、教員一丸となって、授業改善に努めて参ります。学生諸君においても、アンケートの回答に真摯取り組み、正確性の高い結果となるようご協力をお願いいたします。

索引

浅川 茂実	74
安部 久美	52
池田 三鈴	20,63,64,78,101,119,134
石川 雅俊	107
磯部 知愛	28,37,73,85,132,138
糸山 昌己	140
岩久 由香	136,139
岩崎 朋枝	143
及川 夕美	55,111
大國 ゆきの	25,49,83,103,117,130
大澤 洋美	32,90,96,106,142
甲斐 聖子	35
片貝 晴夫	51,53
北洞 誠一	120,135
金城 悟	70
郡司 敦	29,48,57,86,99,113,116
小泉 左江子	58
後藤 悌二	147
今野 浩子	43
白山 智丈	54,110
鄒 敏俐	141
杉本 亜鈴	23,40,81,102,124,149
高橋 能樹	75
武井 大輔	42,45
田中 浩二	26,61
津久井 康明	39,76,89,121,128
土屋 朱帆	41,92
寺田 清美	21,72,79,98,126,137
永井 優美	33,38,47,91,105,109
中川 瑞葉	56,112
永田 陽子	122
中山 恭一	44
能渡 綾菜	69,127
馬場 康宏	27,65,84,100,115,118
福山 多江子	30,46,62,87,104
藤川 志つ子	146
藤村 秀子	67,125
星井 純子	68
堀内 秀雄	31,60,88,93,94
松本 純子	22,34,80,95,114
松本 紀子	144,148
村上 葉月	131

索 引

森 眞理	59
矢澤 由紀	108
安見 克夫	19,66,77,97,123
吉田 博行	24,36,50,71,82,129
淀川 裕美	145
渡邊 晶	133